

ニコラウス・クザーヌスの

自然哲学の研究

(課題番号 03610006)

平成4年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書

平成5年3月

研究代表者 八巻和彦

(早稲田大学商学部教授)

は し が き

本研究成果報告は、「ニコラウス・クザーヌスの自然哲学の研究」という課題で、平成3～4年度の科学研究費補助金（一般研究C）の交付を受けて遂行した私の研究の成果の概略を報告するものである。

申請の段階に記したように、私のこの課題は三年間にわたる研究として計画されているものであり、今年度はその第二年度にあたる。従って、研究全体は未だ完成していない。しかし規定に従って、ここに研究成果の現段階での概略を記して、その責めを果たすものである。

上記のような事情のために、現段階での研究対象はニコラウス・クザーヌスの初期著作および中期著作に限られていることも、予め断っておきたい。なお、来年度以降において後期著作まで研究対象を拡大することで、この研究課題をまとめたいたいと考えている。

研究組織

研究代表者：八 卷 和 彦（早稲田大学商学部教授）

研究分担者：な し

研究経費

平成3年度 400千円

平成4年度 300千円

計 700千円

研究発表

(1) 出版物（永井博『哲学の稜線』（創文社、平成5年8月刊行予定）

(2) 新聞掲載（毎日新聞（夕刊）平成5年3月30日）

I. 神の A e n i g m a としての被造世界

既に、昭和57～58年度の科学研究費補助金（一般研究C）の交付を受けてなされた私の研究「ニコラウス・クザーヌスの後期著作における〈idiotia〉思想の探究」で萌芽的に明らかになり、その後、昭和60年度科学研究費補助金（一般研究C）の交付を受けて深められた私の研究「ニコラウス・クザーヌスの後期著作における aenigma 思想の研究」でさらに明らかになったように、クザーヌスには「 aenigma 思想」とでも称することができる世界把握が存在する。それは典型的には、彼の初期の著作 De docta ignorantia（『知ある無知』（1440年））の以下のような文章に現れている。「われわれのきわめてかしこくきわめて敬虔な博士たちのすべてが一致して説くところによれば、眼に見えるものは、真実に、眼に見えないものの似象であり、創造主は、いわば鏡のなかでそしてぼんやりした像のなかで被造物によって知られる」（第一卷第十一章）

これは、現実の世界を、その創造主たる神の aenigma（ぼんやりした映像）にとらえることであるが、クザーヌスにおいて特徴的なことは、1)「世界は神の aenigma（ぼんやりした映像）にすぎない」にとらえると同時に、2)「世界はぼんやりはしているが、そこまでは神について認識できるものとして、神を映している」とするのである。つまり、 aenigma（ぼんやりした映像）の思想が両義的である。それゆえにこそ、私はいま、「 aenigma」を、伝統的な訳語である「謎」とはせずに、「ぼんやりした映像」としたのである。

さらに留意すべきことには、クザーヌスにおける aenigma は単に人間の認識が正確ではないという意味での「ぼんやりした映像」であることを意味しているだけではなく、世界総体が（神の）ぼんやりした映像であることも意味しているのである。ここから、「 aenigma 思想」が、その語形から想像されやすいような、たんなる認識批判の思想であるだけでなく、世界の存在意義を定めるという点で、存在論的なものでもあることが明らかになる。この事態を端的に表現すれば、世界は神についてわれわれに語りかけているのである。世界はそのような役割を果たしているものであって、けっして単なる死んだ無意味な世界なのではない、ということになる。

逆にとらえ直せば、世界と神との関係が、神秘主義において一般にそうであるような（例えばグノーシス主義におけるような）、対立的関係に立っているのではない。ここにキリスト教信仰の場においても、「自然研究」へと向かう積極的な根拠が確立されていることになる。

この存在論的構造と相応しつつ、認識論的に見て特徴的なことは、クザーヌスにおいては、〈visio facialis〉（至福直観）と〈aenigma〉（ぼんやりした映像）が対立するものとしては考えられていないことである。ところがキリスト教の伝統では、まさに逆であって、この両者は、いわば対立的に考えられてきたのである。例えば新約聖書「コリント人への第一の手紙」13章12節で、「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている、しかしその時には、顔と顔を合わせて、見るであろう」と記されている通りである。

しかしクザーヌスでは、上で記したように、両者が対立的、排斥的にとらえられることなく、両者が互いに何らかの仕方で関係を有しており、それゆえに、それぞれが独自の存在意義を有するものとしてされているのである。つまり、人間の真理探究にとって共に有意義なものである。このことは、クザーヌスの晩年の著作 *De possest*（『可能現実存在』）において典型的に示されているとおりである。

今、私は「両者が互いに何らかの仕方で関係を有している」と記した。その意味は、すでに私が拙論「フリートリッヒ・デッサウアーのクザーヌス像」（和歌山大学教育学部紀要（人文科学 第38集 1989）131頁で述べたように、〈aenigma〉（ぼんやりした映像）を研究することは、真理を獲得するためにふさわしい *dispositio*（心の整いのよさ）を形成することになるという意味で、関係があるのである。しかしこの関係は自然科学的な意味での「方法」ではない。つまり、一定の手順を踏み一定のエネルギーを投下すれば、誰でも自動的に「真理」が手に入るということの意味での関係が、〈aenigma〉（ぼんやりした映像）と〈visio facialis〉（至福直観）の間に存在しているわけではない。この点は強調されねばならない。

このような存在論的にも認識論的にも特徴を有するクザーヌスの「aenigma 思想」は、認識論的な場でさらにつき進められる時、知的探究における専門性の否定へとつながると思われる。つまり、いずれにしても「神のぼんやりとした映像である」世界

および人間であるかぎりにおいて、それを研究するいかなる専門家も、例えば聖職者であれ学者であれ、真理を独占的に獲得することを主張することができなくなるのである。これは、クザーヌスにおける「Idiota の思想」において展開されていることである。すなわち、非専門家・俗人さらには愚者としての Idiota であっても、否、Idiota であればこそ、真理に到達できるとされている。それを実現するのは、人間としての能力の高さでもなく、また知識の量でもなく、信仰の深さのみであるとされる。自らの無力と愚かさを深く悟る者こそ、深い信仰をもつことができ、その結果、神から、真理に近づくことが許されることになるという思想である。ここで説かれている事態の特色は、例えばプラトンのイデア説と比較すれば見やすいであろう。プラトンにおいては、イデアの世界に到達し、善のイデアを目のあたりにすることのできる者は、結局のところ限られた哲人でなければならないのである。しかしクザーヌスにおいては、一介の木さじ造り職人であっても可能なのである。

以上述べたところを、1) 世界を、真理探究のために研究に値する対象としてみなすこと、2) その真理探究は専門家だけではなく、信仰をもつ誰にでも開かれた営みであること、の二点にまとめるならば、本来の姿としての近代自然科学の黎明期の先駆であるとも言えることができるだろう。

しかしながら、再び留意しなければならないことは、その後に展開された近代自然科学にとっては、真理探究の意味があまりにも世俗化されすぎて、その「黎明期の本来の姿」からは遠くかけ離れてしまっているのである。つまり、元来が神の aenigma であった世界が、単なる知的好奇心の対象としてのパズルとしての世界へと変わってしまった。つまり、探究が自己目的化してしまい、aenigma の背後にある「真理」・意義・価値を探究することが忘却されているのである。

II. 数学・幾何学への関心

クザーヌスの最初期の著作である *De concordantia catholica* (1435年頃) には数学・幾何学への関心は見られないが、彼が後の自身の哲学的探究において、その方法

として数学や幾何学に強い関心をもっていたことは、よく知られているように、初期の著作 *De docta ignorantia* (1440年) 以後に明白である。例えば、上の I の冒頭で引用した第十一章の表題は「数学は、さまざまな神的事実を把握する上で、きわめてわれわれの助けになるということ」と題されている。そして、この章の末尾で、「古代の人たちの歩んだこの道を歩みながら、かれらとともに道を急ぎながら、われわれは言う、象徴によってでなければ神的事実へと近づいていく道がわれわれに開かれていないがゆえに、われわれは数学的なるし *mathematica signa* を、その消滅することのない確実さのゆえに、よりいっそう適切に使用しうる、と」。そして、「古代の人たち」としてはピュタゴラスやボエティウスの名をあげているが、この数学・幾何学への関心においてクザーヌスが直接に影響を受けたのは、ライムンドゥス・ルルスであったことが近年の研究から明らかになっている。そして、ちなみに、ルルスはイスラム文化との接触から、この方面への関心を喚起されたことも明らかにされている。

さて、クザーヌスの真理探究の場において、その方法として数学・幾何学に強い関心があると言う場合、それは当然のことながら、直ちに近代科学の意味における関心ではない。彼が関心を抱いた第一の根拠は、数学や幾何学が経験から超越した独自の世界を有しており、それとして自己完結していることである。つまり、数学や幾何学のもつ論理を純粹に展開していくと、人間は感覚的な場面で実際に経験することは不可能であるが、理性としては容認せざるをえない世界が成立してくるのである。例えば、クザーヌスはその例として無限大の円の円周は無限な直線と一致せざるをえないことをあげている。このような超経験性を助けとして、神という、同じく超経験的な存在をいくらかでも人間が理解できるようになるのではないかと、クザーヌスは考えているのである。

さらに、クザーヌスが数学・幾何学に強い関心を抱く第二の根拠は、世界が全能の神による被造物である限り、それを背後から美しい秩序が支えているはずであり、その秩序の美しさは、数学的である場合がもっともふさわしいという考えである。これは、典型的には、*De docta ignorantia* に続いて書かれた *De coniecturis* (『推測について』(1441年頃) に「普遍(宇宙)の図型」として示されている、各段階が

三個ずつの円で秩序付けられて、総数40個の大小の円からなる、全体で四重に円で囲まれた図形に構想されている。この構想には、明らかに偽ディオニュシウス・アレオパギータの『天上位階論』の強い影響が伺われるが、クザーヌスの独創は、それを円という、半径はそれぞれ異なるが、形としては必然的に相似である図形で描いたところにある。つまり、ヒエラルヒーをもちながらも、構造としては同一の幾何学的秩序が、宇宙を背後から支える構造としてはもっともふさわしいとみなしたのである。

しかしながら、ここで確認しておかねばならないのだが、クザーヌスは、まず最初期の段階では、偽ディオニュシウス・アレオパギータの影響のもとで、世界は各部分が、例えば国家が聖職者・王侯・平民という三身分からなるように、三が一セットとなる構造を有していると考えているのではあるが（*De concordantia catholica*, I, C. 2, n. 11）、具体的な個々の存在の中に多様な数学的秩序が内在しているとは考えていないのである。この「三が一」の秩序の内在は、神における「三位一体」の *aenigma* として構想されているのであることも、付記しておこう。

次の段階で、つまり *De docta ignorantia* では、それが進んで以下のような記述となる。「神は世界を創造するさいに算数学、幾何学、音楽および天文学を同時に使用した。それで、われわれもまた、諸事物や諸元素や諸運動の比的な関係を探究するにあたって、これらの学術を使用する」（第2巻第13章）

しかし、この段階ではまだ「これらの学術」を使用した実験は行われていない。

ところが、中期になると「実験」へと、クザーヌスの探究は進んでいくが、それについては後に言及することにしよう。

III. 世界と自然

次に、クザーヌスの「自然」概念について述べよう。この「自然」とは原語で *natura* であるが、まずこれが「世界」*mundus* とどのような関係にあるのかを、見定めておく。「世界」とは、クザーヌスにおいては神によって創造されたものの総体と考えられている。たとえばこう記されている。「神は無限であり、これにしたがって

世界を無限なものとして創造することもできたけれども、しかし——可能性は必然的に縮限されており、適応性は絶対的でも無限でもまったくなかったから——世界は、この存在の可能性のために、現実無限でありえなかったし、より大きくも、あるいは、その他の仕方でもありえなかったのである」（*De docta ignorantia* 第2巻第8章）。また、しばしば「世界すなわち宇宙 *universum*」とも言い換えられる。（同書 第2巻第4章）つまり、世界とは神によって創造された秩序を有するものと考えられているであろう。

これに対して「自然」はどうか。クザーヌスには伝統的な「自然」観念も存在する。「技術 *ars*もまた、できるかぎり自然を模倣するけれども、けっして自然との厳密な合致には達しえない」（*De docta ignorantia* 第2巻第1章）と記しているが、これは、アリストテレスの『自然学』第2巻第2章の記述に従っているのである。『自然学』の直前の箇所においてアリストテレスは、「自然によって存在するものどもは動物とその諸部分や植物や単純な物体、たとえば土、火、空気、水などである」とした上で、自然の意味を、第一に「それ自らのうちにその運動・転化の原理をもつところのものどもの各々の基体であるところの第一の質料」であり、第二に、「それら自らのうちに運動の原理をもつものどもの型式であり形相である」としている。これを踏まえてクザーヌスが上のように記しているのであれば、この「自然」観念は哲学に伝統的なそれであることになり、実際そのように理解して齟齬をきたすことのない文章である。

ところが、クザーヌスは同じ書物の中で、次のようにも記す。「この霊（形相と質料を結合させる万物の霊 *spiritus universorum*）は、全宇宙とその個々の部分とにあまねく拡散し、縮限されている。これが自然 *natura* と言われているものである。したがって、自然は、いわば、運動によって生成するところの万物の包含 *complicatio omnium* である」（*De docta ignorantia* 第2巻第10章）。この「自然」は、上で見たアリストテレス以来の「自然」観念とはいささか異なるものである。たしかに「運動」の要素を有し、「形相」と「質料」に言及されている限りではアリストテレス的であるが、そこに「万物の霊」が働いており、それが万物に拡散し縮限されている状態を「自然」と言う、としているのは、アリストテレスとは異なるであろう。

では、なぜここに「万物の霊」が介在するとされているのか。これはプラトン主義の「世界靈魂」が、クザーヌスによってキリスト教的に変形されたのである。自然の運動は、アリストテレスの言うように「自然的」なのではなくて、神に由来するのであるが、それが「万物の霊」の媒介によって現実化していると考えられているのである。

以上のように見てきたところで、「世界」概念との関係を明らかにするべく「自然」観念を整理しておこう。つまり、神によって創造された「世界」が「運動」として存在している、とクザーヌスによって把握される時に、それは「自然」とされているのであろう。

ここから、アリストテレス的ではなく、さらに中世のキリスト教の伝統をも超えることになる、もう一つの「自然」観念が生じることになる。それは「宇宙の無限性」および「地球の運動」という思想である。「宇宙内の万物はどれひとつとして、可能態と現実態とその結合の運動とから成る一なものではないものはない……われわれは、運動において端的に最小なもの、すなわち、固定した中心に到達することはない、なぜなら最小なものは最大なものと同じしなければならないから。それゆえ世界の中心は周と一致する。それゆえ、世界は周をもたない。……世界は、（神が無限であるという意味で）無限なものではないけれども、その内部に世界を閉じ込めるような諸限界に欠けているがゆえに、有限なものとしてとらえることができない。……地が運動することは明白である」（*De docta ignorantia* 第2巻第11章）。

たとえ純思弁的であろうとも、自然についてここまで透徹して考えた時には、中世において一般的であった「自然への恐れ」は消失しているであろう。下村寅太郎はその著『自然哲学』において、中世では「自然」は「神の恩寵 *gratia* 」と対立して考えられていて、後者によって克服されるべきものとされていた、としている。この事態を社会的に見れば、中世ヨーロッパの未だ残存するゲルマン的要素への恐れとみなすこともできるし、また当時のヨーロッパ世界そのものの「人跡未踏としての自然」の状態への恐れを表しているともみなすことができるだろう。象徴的に表現すれば、古代ローマ帝国の滅亡によってローマ文明が退いた後を覆いつくしたゲルマン的森林の中で、キリスト教が文明の灯をわずかに点々とかかげて、それを懸命に守って

いるという状況とも言えるだろう。

哲学的に「自然への恐れ」をとらえてみれば、ひたすら安定 *stabilitas* をもとめる中世の精神的性向にとって、運動する自然は、本来回避すべき危険なものであっただろう。神の創造した世界に不安定な要素が残存することはありえないことであつただろう。しかし、クザーヌスによって、運動が、自然総体に運動する秩序として本質的に内在しているものであつて、かつ、それを哲学的思索によって説明することができるのであれば、それに対する恐れは消失することになるのである。

IV. 運動的秩序をもつ自然

すでに度々言及したように、クザーヌスにとって自然は明確なヒエラルヒー的秩序を有するものである。それは、最初期の著作 *De concordantia catholica* から明らかである。「神に由来する万物は必然的にヒエラルヒー的に秩序付けられている」(同書 III, c. I, n. 293) この思想は彼の主著 *De docta ignorantia* に至れば、いよいよ明白である。そして、そのヒエラルヒー的秩序の思想は擬ディオニュシウス・アレオパギータの『天上位階論』の影響が強いことも既に記した通りである。しかし、クザーヌスの独創は前章で見たように、自然が運動としての秩序を有するという思想に到達したことにある。

この点についてももう少し子細に考察しておこう。宇宙に段階的な合唱隊 *chorus* としてのヒエラルヒー的秩序が存在するという思想自体は、上で記したように古くからある伝統的なものである。そして、その秩序に含意される価値の差異を前提にすれば、上の秩序の中で妥当する法および性質は、それより下の秩序では妥当することがないのも、当然である。これは、アリストテレスが『天体論』第一巻で、月より上で天界と月より下の世界との間に区別を設定して以来の伝統であつた。

ところがクザーヌスは、奇妙なことに *De concordantia catholica* において、カトリック教会内のヒエラルヒー的秩序について、下位において妥当することが上位にも妥当するという主張をしているのである。例えば、「司教は自分の司教区全体にわた

る管轄権をもっているけれども、彼の部下である聖職者の同席なしには訴訟を司ることはできないし、重大な判決を下すこともできない。それゆえに、教皇も普遍教会にかかわることがらについては、同じように行動することが義務付けられている」(I, c. XXI, n. 192) と。同じような主張は、同書 I, c. XXIV, n. 202 にもある。論理的に考えれば、このような主張は常に妥当性を有するとは言えない。それにも関わらず、なぜクザーヌスはこの主張が有効性をもちうると考えたのだろうか。

そこに、私はクザーヌスの秩序観念の特徴が現れていると思う。つまり、クザーヌスの思想で重要な役割を果たしている思考の図式である、*complicatio - explicatio* (「神が万物を包含している」 - 「神が万物に展開している」) が、ここでも作用しているであろう。さらに、これもまたクザーヌスに特徴的な絶対者からの視点で、上位と下位の関係をとらえるならば、その間の相違は相対的なものにすぎないから、神の高みから見ると、まったく意味を失ってしまう程度のささいな相違であることになる。つまり、秩序が存在するとしても、それが被造世界のことであるかぎりには、それが絶対的な価値の相違を意味するものではないことになる。

ここから、自然の *Uniformity* (斉一性) の観念に到る道筋が開ける可能性があることも見やすいところであろう。

そこで、クザーヌスの中期の著作で、カッシーラーらによって近代自然科学の先駆的著作とされている *Idiota de staticis experimentis* (秤の実験) における「実験」に注目してみよう。この本の中でクザーヌスは、自然における「質」の相違を、秤を媒介にして「量」の相違から判定できるのではないかという思考実験を遂行している。例えば、水の質の相違を厳密な重さの測定によって判定できるのではないか、そうであれば人間の尿の重さを計ることでその人の健康の度合いを測定できるであろう、とする。また水深や船の速度の測定等の運動的な測定の方法も提唱している。

自然の中に秩序・法則性を発見しようとする、きわめて意欲的なクザーヌスの姿勢が如実に現れている。この点ではきわめて近代自然科学的である。しかしながら、早くも *De docta ignorantia* で彼は書いている。「彼(神)は、これほど驚くべき世界の機構によって、驚嘆するようにわれわれが導かれることを欲してさえいる。しかしながら、われわれがこれ(世界の機構)に驚嘆すればするほど、彼はわれわれにた

いしてこれを隠してしまう。なぜなら、全心全精力を傾けつくして探し求められることを欲するのは、彼ただ一人なのであるから」(第2巻13章)。つまり、驚嘆すべき自然の秩序は、われわれがその創造主である神に向かうべく提示されているものであるとされるのである。

これほどに多様な運動をもち、生々流転してやむことのない自然、まさにクザーヌスの言う「霊の充満としての自然」、あえて再び新プラトン主義的に表現すれば「命ある自然」のその中に、われわれが何とか秩序を発見しようと試みて、その結果、見事にある秩序が発見された時、その目的は、その秩序そのものにあるのではなく、その秩序を発見する喜びにあるのでもなく、その秩序が何かの印 *Zeichen* であることを認識すること、つまり神の *aenigma* であることに思い到り、その *aenigma* の意味を解読することにあるのだ。

かくして、クザーヌスの自然探究の目的は、その構造において、われわれの研究の出発点であった「*aenigma*の思想」と合致しているのである。しかし当然のことながら、思考の方向は逆である。つまり、クザーヌスの自然探究は、「*aenigma*の思想」にその起源を有していることになる。

最後に、われわれの研究に残された課題に簡単に言及しておきたい。「運動的秩序を有するものとしての自然」の探究へと人間が向かう時に問題となるのは、人間の探究の手段たる言語が運動の把捉には無力であることである。そこから、Nominalismへの傾向が後期のクザーヌスの思想に現れているのではないか、それを晩年の著作 *Compendium* 等を探ることが、新たな課題となる。また、Nominalism と、クザーヌスの数学・幾何学への関心がどのような関係に立つかも、課題の一つとなるだろう。その延長上には、ライプニッツにおける哲学の数学的方法論が現れていることも、視野に入れねばならないだろう。